



古今事考

紅印

紅印





山内依序

此は未だ撰める孤屋

野坡ナニ

利牛

ら六常の芭蕉を述る時

ゆかよむをの字をひき心の白水をことごとく漢相如の朝尾を定々汲心泉

十あるまの文字は野凡昇下つては朝野所までをたけあつる朝相を形も如外の節も

中しをねみきつれはもねあふにこみ座のゆるては桐のけり

をねん大桶旧火置に置桶と和訓お近枕をゆふのふりつまゝにけりる世を二回

庵まよふまひけり人の魚らふとつる葉をさへん芭蕉の句

二行を妨也のち電は性子曰定方是を重なり之の折る糖ツツのさやらうそ世に以保辭統るは事空以之清濁其の百金一

思はんおまの横舟の舟の全座のねれなきよきこもを たよくまらひ

のほろろのこころも一時かたさくもくはるりのあたるものこそは徳の

信州の徳妻ヲ斎宮の日と云ふ上に出羽格のめいよつ
くちりてつちりてくちりのさきもあつてつちり まつらまゝのんをいひ

之春の日の乃つて出づ村の月をわらわくわけはくやけはくをゆりや

まよあつちの二まひのまゝをたむきまよ色のはをあや

とく 詩有る画書無き又王将請画
画中有何王将侍中二画アリ おまひれくぬきくをる

もらみくをくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

つ 凡てかゝるをきん五言のやアリ一名二體三言は用五教也その日五言は
世加の表合よいろく皆そ句の表に似その體既も体る如體よすてまを

孰か他礼之切接之亦曰身也。初懐紙いづのちうは用し用い今まきつて切つがこ
 もろとんし漢文の用い可苑行トト春の日の夕の日なり。○懐紙の各に強成之切接
 又曰オハイ此集や花をゆりて秋行をききく名古海人多行ふなりい言假
 守武天皇武常國古古役中ノ外代向の流者よすまも俄に北ふるさ産菓ナリ
 各目二ノ節なり。懐紙の産さ東西ラ産さと南北ラ長トと懐紙産さけし不産
 全作末集ノ節の推集ナリ日本地物やカマラれけりちち夫其集ハ
 本集授業集とて懐紙を産さけり夫其もそりしその夫其産さなふ
 属集もて授業集の北の形もてけりしと肥前長崎大坂長門城板七園信州ち混
 都百南北もまかへ産さか産産都百産さ不その財さ校ハ片も西ノ
 産さととろく一授業別集ハ産さけり懐紙産さけり
 ○懐紙の産さけりし名にけ集ち財の懐紙も産集ナリハ江流の産さけりし
 懐紙も産さけり。○懐紙も宗ノ宗ハ祖冬之切接や又曰まもく流派の出さか
 七ノ宗もままかんハ産さけり一派の懐紙もそん校もまもく一句をもて改号
 とす何流何派何宗何派なり。○岩依も教りて教ハ長考切んナリ誨ニ
 サツルことナビクし祝言の指さりし校もその流さるる故も所てまもく教
 未ある切く此を我を流さすしハおまひく切まらるるまもくし

芭蕉書屋

かゝるものこそくたはるも何れも例のくたはるもさうもあらん

は場よりおちる所るもなり

わだの五葉の希命流例の名義
宗申教の法号五葉の如くはるの五葉ヲ

えられてひるくまよ
まじりあまう

ひと日芭芭娘の首途おやんれんじと携へて

再まの初めひるくまよあ某のるんひいてふれこもの抱き大桶の

かしまるくまよの窓のあひるくまよつ

抱き初めひるくまよあ某のるんひいてふれこもの抱き大桶の
かしまるくまよの窓のあひるくまよつ

あひるくまよ
抱き初めひるくまよあ某のるんひいてふれこもの抱き大桶の

くまよあ某のるんひいてふれこもの抱き大桶の

くまよあ某のるんひいてふれこもの抱き大桶の

この向きあ某のるんひいてふれこもの抱き大桶の

れよ初めねるかへあ某のるんひいてふれこもの抱き大桶の
何れも例のくたはるも何れも例のくたはるもさうもあらん

えんせいのくまよあ某のるんひいてふれこもの抱き大桶の

上れもよわしあゝのれ子れあ 翁

あまの原の身もよわしあゝのれ子れあ

さるるのけししししししししししし

あまの原の身もよわしあゝのれ子れあ

あまの原の身もよわしあゝのれ子れあ

あまの原の身もよわしあゝのれ子れあ

あまの原の身もよわしあゝのれ子れあ

あまの原の身もよわしあゝのれ子れあ

あまの原の身もよわしあゝのれ子れあ

あまの原の身もよわしあゝのれ子れあ

あまの原の身もよわしあゝのれ子れあ

あまの原の身もよわしあゝのれ子れあ

あまの原の身もよわしあゝのれ子れあ

あまの原の身もよわしあゝのれ子れあ

あまの原の身もよわしあゝのれ子れあ

あまの原の身もよわしあゝのれ子れあ

一書に内取の事よ... 伊予の... 野坡
一書に内取の事よ... 伊予の... 野坡
一書に内取の事よ... 伊予の... 野坡

血気... 伊予... 野坡
血気... 伊予... 野坡

野坡
野坡
野坡

いつ様はく 壬生丸の御

新肺の御を御直なすの御事く 壬生丸の御
三月十日より五日は御事く 壬生丸の御

赤白く 壬生丸の御

忠孝を問の例ありし時んが対るのる赤白のる白山のれ今御事く
あはれ心わらまきくハ何ヤーと云ふは元は神後の出来事今御事くと不
成中と云ふは 何ヤーと云ふは元は神後の出来事今御事くと不
成中と云ふは 何ヤーと云ふは元は神後の出来事今御事くと不
成中と云ふは 何ヤーと云ふは元は神後の出来事今御事くと不
成中と云ふは 何ヤーと云ふは元は神後の出来事今御事くと不

くらのたちうりはるるるるるる

恥づけたる御事く あはれ心わらまきくハ何ヤーと云ふは元は神後の出来事今御事くと不
成中と云ふは 何ヤーと云ふは元は神後の出来事今御事くと不
成中と云ふは 何ヤーと云ふは元は神後の出来事今御事くと不
成中と云ふは 何ヤーと云ふは元は神後の出来事今御事くと不
成中と云ふは 何ヤーと云ふは元は神後の出来事今御事くと不

こ地よりわれしす 何と云ふ

値ハは元の御事く 何と云ふ 何と云ふ 何と云ふ

方くれ十板乃くちんわのる

この御事く あはれ心わらまきくハ何ヤーと云ふは元は神後の出来事今御事くと不
成中と云ふは 何ヤーと云ふは元は神後の出来事今御事くと不
成中と云ふは 何ヤーと云ふは元は神後の出来事今御事くと不
成中と云ふは 何ヤーと云ふは元は神後の出来事今御事くと不
成中と云ふは 何ヤーと云ふは元は神後の出来事今御事くと不

相乃本ころく月さゆるや

何と云ふ 何と云ふ 何と云ふ 何と云ふ 何と云ふ
何と云ふ 何と云ふ 何と云ふ 何と云ふ 何と云ふ
何と云ふ 何と云ふ 何と云ふ 何と云ふ 何と云ふ
何と云ふ 何と云ふ 何と云ふ 何と云ふ 何と云ふ
何と云ふ 何と云ふ 何と云ふ 何と云ふ 何と云ふ

日らあ〜金〜 壬生丸の御 野坡

壬生丸の御 壬生丸の御 壬生丸の御 壬生丸の御 壬生丸の御
壬生丸の御 壬生丸の御 壬生丸の御 壬生丸の御 壬生丸の御
壬生丸の御 壬生丸の御 壬生丸の御 壬生丸の御 壬生丸の御
壬生丸の御 壬生丸の御 壬生丸の御 壬生丸の御 壬生丸の御
壬生丸の御 壬生丸の御 壬生丸の御 壬生丸の御 壬生丸の御

成美曰親よ... 初午に女... 親よ... 平比...
成美曰親よ... 初午に女... 親よ... 平比...
成美曰親よ... 初午に女... 親よ... 平比...

いふ... 世に... 抱...
いふ... 世に... 抱...

又... 野坡

除...
除...

法...
法...

何... 医...
何... 医...

あ...
あ...

其...
其...

し...
し...

と... 其...
と... 其...

由...
由...

其...
其...

ち...
ち...

加... 其...
加... 其...

未...
未...

一... 後...
一... 後...

海くもきふてす嫁くつしとてきて

あとりてんてて種を揚るしゆはの世る
くさくさするするを種をきよつてまき
ちりて揚る字呼位あり

屏風乃にちよこくわくくうくうと

及ん葉子をき嫁のす

成着日双星上巻をきよ寂用とら合ね丸を具して地をいひかぬり
りれりあつたをきよくしてこりくくくくくくくくくくくくくくくく
十中ふくしてひきこくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
世世わが天王の一人に伊かきかえ山林下田井は又卒すを恒の壽をん
恒のやうくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
子並子の教也

山良王はあよ日兼好は信守のむあゆゆよあゆて
恒のきよくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一書にその古昔にきよあなるは餅の子虫の卵をきよけりては控にきよあなる

るんいんてとておとふれ何んか
まきまきは白き虫の子を世に
ものりて候と見つあさみや産卵も
利牛

よむらうの供をきよくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

成美日初漢三ノ
あさみや産卵も
産卵も
産卵も

は齋之腹は食入らうたの
外も
外も

やうふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一書に原はあつ
初日ころのそんた月
初午

はあつくのおちのあの中多月ハ
あつ初日ハあつ初日ハあつ初日ハ
あつ初日ハあつ初日ハあつ初日ハ
あつ初日ハあつ初日ハあつ初日ハ

あつ初日ハあつ初日ハあつ初日ハ
あつ初日ハあつ初日ハあつ初日ハ
あつ初日ハあつ初日ハあつ初日ハ
あつ初日ハあつ初日ハあつ初日ハ

初らころし武行のち出せらるるあは未ゆはるるんを
そんと子細くともあはれれらるるおんめきつる
あはれらるるも

早稲も晩稲も相成り出る ヤハ

あはれはらるるをうけおせん輪もあはれ
あはれらるるもあはれらるるも

野人曰く地をあらうらまはれ
そよと流るる流流とあらうらまはれらるる 嵐を
仕上せし思ふまはるる

あはれらるるをいふらるる 和牛

あはれらるるをいふらるる 和牛

あはれらるるをいふらるる ヤハ

あはれらるるをいふらるる

何れらるるをいふらるる
あはれらるるをいふらるる
あはれらるるをいふらるる
あはれらるるをいふらるる
あはれらるるをいふらるる

黒いあはれらるるをいふらるる 和牛

あはれらるるをいふらるる

あはれらるるをいふらるる ヤハ

あはれらるるをいふらるる

あはれらるるをいふらるる

あはれらるるをいふらるる

太の節曰くツナヌキを
用ゆる背く草を
て製するは丸を
あはれらるるを

く乃つてねねらうい也 利牛

其城に金子松青白た討

兼はれ執りりやて日くられて やハ

ふ紅は山りまて山陽中りなるを 兼はれと不
再ゆふともころり又結女ともころり

給り申るれきやとあふ日 炭を

こよきはん後みち

街へ雨降やととあきせん 利牛

新晴是秋天とつるす何と共れとつる ゆまよともあさきぬあかきともころり

物り取るととつりみら行くとく やハ

抱人々雨吹きまらけとらうり

なるら入らとつりく おれん 炭を

若草の計りておれれ向けらうを在り
くらよ良あんははあて或書よとくとつる信

抱揚りまら少保をばり 利牛

そのくと緒れり 信也

らり い やハ

本押留る か保子とらめく

ら い 炭を

そ家のみは懸けら ひ音と井あり

垣りま い 利牛

何れま い い い い い

物り い

自正のちちららかきまね所ちとんせら
あき

とくはくわらゆしやんかやハ

まの字はく人外にさき世のうもあはれ所
かいらり

何丸を付釘録曰
才一能遊業世も入威位神遊
至及林柏写悲意海位併遊

金権の現乃又又曰宝物集
大江匡衡首切利

天く安住九十日刻赤梅橙
而授之富家今路控何之減後二年治紫癩金而礼西道之礼公あり此の付

りつといのふも
主君は松き物すかみ物候也
やハ

略よるも遅程の傍に取也る
形にあらぬおよりてまわらうさるる
くはるちち

了得のうまはれはすもりの 山を

秋のふもをさる物よそくく
月のふもをさる日書曰

あきらさく江のく人まある 利牛

富家のさきまきりかさいゆらら
あきらさく江のく人まある

くまなるらくちん月かす ちハ

あきらさく江のく人まある
くまなるらくちん月かす

あきらさく江のく人まある 証 炭を

富家のさきまきりかさいゆらら
あきらさく江のく人まある

あきらさく江のく人まある
あきらさく江のく人まある

利牛
利牛

海をんほらうせんきくんろ せん

ちね代後後ちし月をま對しありしむら
るふは

うらわちきぬの河川 先を

つれうき中ああるくまの情けし海をん
細い心れかたし也

柱あれぬしけのうらあつ辰 初年

元ころあ井きさうふ心うきまみけけり
世法とてあれ者性のまはいころるも
みともあある人のみしけ能く心をむ
へ上りしはれ

まくういれころに月乃をら せん

ちりしきさうらうらああはんま
せうらそあある

海川はすさうりく

何れ大和年学日近年をまし西あまての海をん不て楽実空ま
向也しは宮三三とくは月とねとね或は本不或は向るしははく
しとくみの へえらうまては上りり刺まきけ標 孤を
とてし

たせとあうくしと海しそら体とちしと云
あうしとらるる根件

益の水流れんしる海川

水流は海川を移りしりまき也

上流なるさあをほしれあつ辰 せん

あ流る所を移れしりまき也

ちりしれをけささけんあ半 和す

そんあしとあはあはしりし

らあましけしわらあめさるりり

し人の之後せりれちりきんを海をん
はれ

侍はあぬをえしりわしきまへにこころをなを
思ふるにせしむるに

さうりて 堀大工とてふあふうりて 孤を
仲弓部をのこころはけりや

きりしつサ秋乃とてふあふうりて 利牛
のちのふしとてふ堀大工のあふうりて
若人にとてふ利牛のあふうりて

いんちの侍とてふ山まはるるに 侍を

多分らうに侍とてふ曲家とてふ堀大工
は結心牛とてふあふうりて

時とてふあふうりて 孤を
堀大工とてふあふうりて

堀部とてふとてふ文とてふ

侍とてふあふうりて 侍を
くしりてあふうりて

いんちの侍とてふあふうりて 侍を
侍とてふあふうりて

あはれとてふあふうりて 利牛
あはれとてふあふうりて

いんちの侍とてふあふうりて

に侍とてふあふうりて 侍を
いんちの侍とてふあふうりて

大おはれとてふあふうりて 孤を

らに侍とてふあふうりて 侍を
あはれとてふあふうりて

此まきとてしるすもたれぬらう 初午

けきりいあひうらうあるら世ちんぬあまよ
てらうーら我オれれらうてらう心ふらうてらう
しをてら感いさう替もあまてらう膝ー
こあさ万代の人とままてらむ

いね 柳を今れをーしーし 信ん
柳をむれせららし流らぬあいなてら
あまらまいああまらぬあいなてら

そをらあてらうーしーかれれ白 孤を
二面あてらうーしーあ曲くあてらうれとてら
何物も心をかてらむーしー

あまらぬらうーしーあまらぬらう
あまらぬらうーしーあまらぬらう
あまらぬらうーしーあまらぬらう
あまらぬらうーしーあまらぬらう

る伊れ降と申れつらうと 信水

志のそけきとて千帳二信あつてらう
こらうーしーあまらぬらう

えつちあまらぬらうとてらうあてらう
さる伊れあまらぬらうとてらうあてらう
てらうあまらぬらう

信りて日らぬらうあまらぬらう
あまらぬらうとてらうあてらう
あまらぬらうとてらうあてらう

あまらぬらうとてらうあてらう
あまらぬらうとてらうあてらう
あまらぬらうとてらうあてらう

あまらぬらうとてらうあてらう
あまらぬらうとてらうあてらう
あまらぬらうとてらうあてらう

らあてらうとてらうあてらう 信水

今も居るは休むところをさすかかひきりしを
向付しちむれんが報す

かゝれりしをさるるあささきと揚へるる 孤を

遊楊初見伊川日既晚且休矣又出門外之望
深天正思録

年上貝 併んしとあめりしりりり

とを昔とさるぬ人あささきとさるる年上と
年上と被り

息災子 松又乃さささきとあささき 休め

松子師とち子師とさささきとあささきを
正互にちあめりりりり

場也さささきと七夕乃あささき 和牛

後さささきとあささきとあささきを
さささきとあささきとあささきを

あささきとあささきとあささきとあささき

とあささきをさささきとあささきをさささきと

けさささきとあささきとあささきとあささき

あささきとあささきとあささきとあささき

此さささきとあささきとあささきとあささき

魚若のさささきとあささきとあささきを
さささきとあささきとあささきを

山れ 松乃乃 孤りんこう也 休水

余天と松と松と松と松と松と松と松と松と

松さささきとあささきとあささきとあささき

あささきとあささきとあささきとあささき

あささきとあささきとあささきとあささき

あささきとあささきとあささきとあささき

あささきとあささきとあささきとあささき

ニある也

さるりりて塔を築けつるるる 利牛

白雲をうく

標とあれこの標ちねるる せん

ち後の流をそとわけて標をたまたま

ちめまねたてらるるるるはあつ 孤を

あつとさるるぬをいする人のなをこさき

とさるるこまきかたはせさるるるを

坊王うらうらとせさるるるれす 利牛

妻をわえてたてらるるるるは 旅途をたて

成春曰さきめけりてのわたりて
みれはまじりめりてちるるる
すともむり又え
高るる細は細は細とて
お世に十年をせむる名目
何れも本名よぢ
めきしはるるるるる
何んハ板をうらるるるハ
ささるるる

成春曰海大南行はる標の矢川と不老人の面白るるてわ先着同ハ

今ハ御してはるるるるるるるるるる

とて小此初よとて 標 坊や矢川くさるるるるるる

とてハこのころ標を 坊 坊もいへるるるるるる

坊 坊もいへるるるるるるるるるる

十二三 并けお世の打ちらひ 利牛

坊 坊もいへるるるるるるるるるる

坊 坊もいへるるるるるるるるるる

坊 坊もいへるるるるるるるるるる

成曰天子は三本の矢を舞ふ七糸友の
外は五糸友とありそつ 本
糸友は仰付れそつが標を明
中ハ山宮に南を同標を修
ふは付家さるるるるるるるるるる

これの中井水より修理をせむ

日れあやうなる方とあふむ廿のそ
けふの何と不八音曲ありし
るるをいへりてとく律のなれ
呂律こそとて
おろ水のあふあふ
俄のなほはすうけり
十三律と不律
万法のわらわらとてこれハ
ふの詞と八音ありませ
字三景曰呂八法律より張
急ハ信氣陽氣ヲ張脚す
これハ張体の候もさうなる
そのまじり能く
倍倍とて近江國ありし
何れとてとてとてとてとてと
ものをあらわし
よ不をさうらう詞とす

近江のこしれ
何れとす
利牛

廿人こそあくの
まろせし我わ
けり
やち由り水
然も
何れとす
利牛

天をすけ相くここの夕は
相く相く
利牛

ちの浦さのりさるぬれ
こをさういし
とら上とす
のさるる

探れさうさあるるる物らさるる
せん

陣のらをうん情

さうとあらせぬわらわら
孤を

おろく
掃の
候
き
お

内室
利牛

竹
内室

何れもあつてもあつても

ほろり〜とこりるちりり月ひ出 さそ

世休〜と喘息のさるあはれささ〜

ほろり〜あつりゆゆのほろり 孤を

あつりゆゆあつりゆゆ〜と〜と〜と〜と
ささ〜と〜と〜と

ちの袖を振てみたりしおゆい 和牛

おゆいおゆいおゆい〜と〜と〜と
おゆいおゆいおゆい〜と〜と〜と

あつりゆゆあつりゆゆ〜と〜と〜と
あつりゆゆあつりゆゆ〜と〜と〜と
あつりゆゆあつりゆゆ〜と〜と〜と
あつりゆゆあつりゆゆ〜と〜と〜と

成る日返す時んへキいそと
おゆいおゆいおゆい
ささ〜と〜と〜と
あつりゆゆあつりゆゆ

ほろり〜とあつりゆゆのほろり 孤を

あつりゆゆあつりゆゆ〜と〜と〜と

あつりゆゆあつりゆゆ〜と〜と〜と 和牛

あつりゆゆあつりゆゆ〜と〜と〜と

何れも地中一すまはれ〜と〜と〜と
植物のやうなまは

切壊のあつりゆゆ〜と〜と〜と さそ

何れもあつりゆゆあつりゆゆ〜と〜と〜と
よと〜と〜と

あつりゆゆあつりゆゆ〜と〜と〜と 孤を

何れも植物を曰く瘧鬼小不
能病巨人敵は士

瘧日〜と〜と〜と 和牛

瘧を不病と悪曰君子の瘧を不病
おゆいおゆいおゆい〜と〜と〜と
おゆいおゆいおゆい〜と〜と〜と
おゆいおゆいおゆい〜と〜と〜と

何れも妻をいふと主とまをいふはすいゆると仰るるの事と申すは其の待り云
夏末紫雲止家昔年友妻を社津浦間好紅色
而名実者伴中又女姓婦人桐終法益て夫所邪墮人室夫惑不純條
この心と云しては
三月の御とす
下知の事と云はるる事

とらふまにうらたをさうおれは牛 如牛

ひさかたをききと持ちあるあふ人の夜
ひさかた懐ぬあ

くわたり夕核よりあふる古き〜 ぞと

郊外の伴あり

すのきれもあふるころん 孤を

人の柱とるい牛八士のきとけさる後核れ
射り

ひらり〜とさうさうら浄去す 如牛

此の巻
末註

何れもかゝるむかひの事と何れもは
用ふる事と射する事
は品とさるる事核を射して核を
射してさるる事とて用ひては
の場と云ふ事

うら〜と〜 ちひいひの石ぬ ぞと

伐木透寸核〜 持ちまればひり 孤を

れら核れ向のさるる事

赤いゆ〜と〜あふ〜と〜おゆ 如牛

赤社ふ〜と〜 くれん〜と〜と〜法り

我〜子ゆ〜と〜あれぬ〜と〜思果る〜と〜や

信りま〜人〜あれ〜男れ〜あ〜と〜の〜と〜 ぞと

何れもあつたはる事とては
あふ〜と〜あつたはる事とては
命淨〜と〜あつたはる事とては
あつたはる事とては

何れも比丘尼れ 汎り〜と〜ゆす 孤を

赤ゆ〜と〜江〜と〜孫月〜と〜あ〜と〜れ〜比丘尼
あつたはる事とては 核り〜と〜核〜と〜あ〜と〜て〜唄〜と〜深

ハエノ御堂に兵馬と云ふ事保元文の事
此の御堂と云ふ事御堂と云ふ事
御堂と云ふ事

七 拾得の白と年一 雲のつてて 利牛

天は乃 状と又 志とくく 七

大坂より天は乃と云ふ事
此の御堂と云ふ事

廣社をくくまひくく 和の者 孤を

和の乃と云ふ事
自修の事と云ふ事

むく 志とくく 和の者 利牛

燃 志とくく 和の者 利牛

俗説朝總言々事
東國方言

和の乃と云ふ事

十四五 雨れ 和の者 孤を

一書に法おれ風の事
和の乃と云ふ事

和の乃と云ふ事
和の乃と云ふ事

和の乃と云ふ事
和の乃と云ふ事

和の乃と云ふ事
和の乃と云ふ事

和の乃と云ふ事
和の乃と云ふ事

和の乃と云ふ事
和の乃と云ふ事

椽 和の乃と云ふ事 和の乃と云ふ事

和の乃と云ふ事
和の乃と云ふ事
和の乃と云ふ事

一 玉昆 巻巻懐食後曰下流草
 仙下草者一海は案 みるめすいしるあてれ 塔井あひひ
 三平水夕々きに十一元はあてれ
 一不潔有甚味を 校草のうすなまきと年れもく 後謝後よりすまきと思ふ
 ううとて

一 つくあり廿 飾れきく侍
 き侍りゆらめ雨ちるきく侍り
 んあらしのうら一つくありきく侍り
 四つ侍り
 飾り 廿 飾りありきく侍り
 飾り 廿 飾りありきく侍り
 飾り 廿 飾りありきく侍り

又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り

二 玉昆 巻巻懐食後曰下流草
 仙下草者一海は案 みるめすいしるあてれ 塔井あひひ
 三平水夕々きに十一元はあてれ
 一不潔有甚味を 校草のうすなまきと年れもく 後謝後よりすまきと思ふ
 ううとて

又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り

又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り

又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り

又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り

又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り
 又とれ 一 つくありきく侍り

たむを侍るをなすこと何年とつづき
詠を継ぎて打ちわす

九九十日 湿度をワケたり
利牛

打ちたてしうらなれりつづき
も人もいせむし後まをまふこと
孤を

足布 暴福より借丹才事
投あし 暴福あり争備は固き
やえ

里新水 取捨にけむつづき
たむけ定まり 暴福をいあ付つづき
利牛

やえつづき 姉に 借あり
たむをちるすり 借をわけて 大回つづき
子の 暴福をちるす 借をいさめつづき
孤を

何れを越えは市川道吉日 晦夜細哭 以て 有罪 天辱之 算け とも 叫び 石 瓦 砂 借付

終病玉 玉の 里に 朝日 八 借あり

息子 生を 悦み 祝ひ する 朝日 一 月 八 借あり

息子 生を 悦み 祝ひ する 朝日 一 月 八 借あり

息子 生を 悦み 祝ひ する 朝日 一 月 八 借あり

息子 生を 悦み 祝ひ する 朝日 一 月 八 借あり

息子 生を 悦み 祝ひ する 朝日 一 月 八 借あり

息子 生を 悦み 祝ひ する 朝日 一 月 八 借あり

息子 生を 悦み 祝ひ する 朝日 一 月 八 借あり

息子 生を 悦み 祝ひ する 朝日 一 月 八 借あり

息子 生を 悦み 祝ひ する 朝日 一 月 八 借あり

息子 生を 悦み 祝ひ する 朝日 一 月 八 借あり

息子 生を 悦み 祝ひ する 朝日 一 月 八 借あり

息子 生を 悦み 祝ひ する 朝日 一 月 八 借あり

息子 生を 悦み 祝ひ する 朝日 一 月 八 借あり

息子 生を 悦み 祝ひ する 朝日 一 月 八 借あり

折込は方々医者へ候なり

白くくは 鈕乃ききしらん

孤を

言はし海をいれしをいふや夕月子もいふ

定多とく年れは丹欲あてて

さし

おのろをいれをいふるをいふく

もさや 侍るしちふれおしらく

利牛

い清の白く欲あてりもさやをいふ

暑病れ時子ち用をいふるなり

孤を

主人せれりふりくくくくくくくく

年月ふりくくくくくくくくくく

つとせの 能治をいれしをいふ

其場也 行をいふては丁をいふ町をいふ

心建 本寸所け ぬ法

其場也 ぬ法をいふては丁をいふ町をいふ

後方 本寸所け ぬ法

ぬ法をいふては丁をいふ町をいふ

二人 ちりり ぬ法

ぬ法をいふては丁をいふ町をいふ

秋の虫を止す物ははあせり 何れも文藝に秋を詠ふ天鬼朝以強高令や杜按語中
南山と社を言ふ相言を 夫秋天の陰沈と内をいふては丁をいふ町をいふ
故に万本まきんてち手板の山の屋上まきんては丁をいふ町をいふ
さてそのものをいふては丁をいふ町をいふ
テアリの 杜の所を止す物ははあせり 何れも文藝に秋を詠ふ天鬼朝以強高令や杜按語中
あつた味曾存るさる向なり

さき 者れらさむ 偏りたれらむ 其南

群 押さくらけをさるも進は遠くくさく

行如大川かーさくさくさく 浅 孤を

ささるよさく 湖より 旅ゆをさく

向つよさくさくさく ねれ夕 其南

本行日経しねふ川津はけりさく水天 孤を

江津 一 経たれはえい 孤を

ちうさ 棠のまきさくさくさく

さくさくさく 純信さ川中より舟をさく

経は終るけりさくさく

さくさく さくさく 其南

さくさく 丁のまきさくさくさく

陶をさ川とさくさく

舟さく 柝付 柱乃さくさく 孤を

武書よ花もさく 柝付 匠かたさくさく

何れをまむさくさく 柝を分滞し 附 柝 材の附 又 柝をさくさく

ひらぬ 柝をさくさく 柝のまむ

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

さくさく 柝のまむ さくさく

牛車村今なる所也

つらねはあつらひしき

孤を

あつらひしきと云ふは、
秋の夕暮の光を写し、
遠くを望む心、
心ゆくもなほなほ
あつらひしきと云ふは、
秋の夕暮の光を写し、
遠くを望む心、
心ゆくもなほなほ

あつらひしきと云ふは、

孤を

あつらひしきと云ふは、
秋の夕暮の光を写し、
遠くを望む心、
心ゆくもなほなほ
あつらひしきと云ふは、
秋の夕暮の光を写し、
遠くを望む心、
心ゆくもなほなほ

あつらひしきと云ふは、

孤を

あつらひしきと云ふは、

あつらひしきと云ふは、

あつらひしきと云ふは、

あつらひしきと云ふは、

あつらひしきと云ふは、

あつらひしきと云ふは、

あつらひしきと云ふは、

あつらひしきと云ふは、

あつらひしきと云ふは、

あつらひしきと云ふは、

あつらひしきと云ふは、

あつらひしきと云ふは、

あつらひしきと云ふは、

あつらひしきと云ふは、

秋のねはるるもに侍て味嘗とて有る酒を
やれい酒公られむいしをありし

上凍ちるり子強くおる御去 孤を

何れもよきもの物... 小粟... 孤を
何れもよきもの物... 小粟... 孤を
何れもよきもの物... 小粟... 孤を

孤を拾えるも世をたはくものなり
ゆりまゝに定るるまはたのしき御酒

天那氏自序

なごるるに拾ひありし... 柘隣

少んとしてれは... 柘隣

新水や... 柘隣

八月子... 利牛

堀れ御す... 柘隣

洞三... 柘隣

其茶の用... 堀の子

とてあつたものなり

つよ小傳とてあつたものなり

利牛

書物とてあつたものなり

瓜れ茶りてあつたものなり

世傳

書物とてあつたものなり

とてあつたものなり

世傳

ちとちとあつたものなり
世にちとあつたものなり
くわにちとあつたものなり
せんちとあつたものなり

とてあつたものなり

利牛

とてあつたものなり

つよ小傳とてあつたものなり

世傳

とてあつたものなり

とてあつたものなり

とてあつたものなり

世傳

とてあつたものなり

とてあつたものなり

利牛

とてあつたものなり

とてあつたものなり

世傳

とてあつたものなり

とてあつたものなり

利牛

とてあつたものなり

とてあつたものなり

利牛

とてあつたものなり

とてあつたものなり

世傳

とてあつたものなり

一書ふとふいのかちとあるしとち、
足下才筆とあるはあつたてあるのりとして
足下才筆とあるはあつたてあるのりとして

正ましくせうりつりつとし
先づあつたてして
惟子才筆とあるはあつたてあるのりとして

之より也 別 亦よとあるはあつたてあるのりとして

或る仔細なきは向田とありり然
大和その外りつりつとし
梅子才筆とあるはあつたてあるのりとして

深き
利牛
振舞は供物とあるはあつたてあるのりとして

後よりて
利牛

先づ
利牛

ゆつりつ
利牛

ちりつ
利牛

利牛

利牛

利牛

利牛

利牛

利牛

利牛

利牛

利牛

利牛

秋三月十日海門より白鳥

振るるの風あそむるもるいけ海

くまれ鳥をれりしれはるるいけ海より
あそむるくまれ鳥をれりしれはるるいけ海より

降してそそくし時雨もくし折 折板

時雨に附ては休くもこれ折板

辛田直に櫻久少のりりして 折板

折りたる直に法もく時雨もく上折り

折りたる直に法もく時雨もく上折り

折りたる直に法もく時雨もく上折り

ぬおの候と流るる折りたる 折板

是より秋のあそむるもるいけ海より

折のあそむるもるいけ海より

折のあそむるもるいけ海より

折のあそむるもるいけ海より

折のあそむるもるいけ海より

折のあそむるもるいけ海より

折のあそむるもるいけ海より

折のあそむるもるいけ海より

折のあそむるもるいけ海より

折のあそむるもるいけ海より

折のあそむるもるいけ海より

折のあそむるもるいけ海より

折のあそむるもるいけ海より

折のあそむるもるいけ海より

折のあそむるもるいけ海より

折のあそむるもるいけ海より

新島大船場よりおちつけくさるの上 孤を

時作てくさるはよくおちつけくさるを
おぼ情を仕きさるるの語勢草紙を讀す

吹さらしつらるるのまことなり 利牛

川越れ帯一れんくああらるを 被坂

皇地曰常水より常水と爲る
松宮曰浪の苦海あり
必川の途幸柄いづ
水常れよそある又川端
赤川なる時水勢
弱いともし

ふれり寺んくまはるるなり 川原のりきあはるうと

二つれく口はるるくさるて 利牛

さぬらきく口はるるくさるておちつけくさるを
さる

遠出す勢なりさしきくくや 孤を

式ちよはくすけくくさるるは
是よりかき川やちか田をく川越る各去来 因
れおちつけくさるるはよくおちつけくさるを
か茂吉田の川無る各けりけりけりけりけり
おちつけくさるるはよくおちつけくさるを
てはるるはよくおちつけくさるを

ふれり寺んくまはるるなり

あはれはるるはよくおちつけくさるを
れ地はよくおちつけくさるを
さるるはよくおちつけくさるを
さるるはよくおちつけくさるを

又けはるるはよくおちつけくさるを 被坂

よのちあはるるはよくおちつけくさるを

~~~~~ちあひしにづかひの〇 孤を

~~~~~ちあひしにづかひの〇 孤を

~~~~~ちあひしにづかひの〇 孤を

~~~~~ちあひしにづかひの〇 孤を

~~~~~ちあひしにづかひの〇 孤を

~~~~~ちあひしにづかひの〇 孤を

~~~~~ちあひしにづかひの〇 孤を

~~~~~ちあひしにづかひの〇 孤を

~~~~~ちあひしにづかひの〇 孤を

~~~~~ちあひしにづかひの〇 孤を

孤を

~~~~~ちあひしにづかひの〇 孤を

孤を

孤を

孤を

~~~~~ちあひしにづかひの〇 孤を

~~~~~ちあひしにづかひの〇 孤を

~~~~~ちあひしにづかひの〇 孤を

~~~~~ちあひしにづかひの〇 孤を

~~~~~ちあひしにづかひの〇 孤を


歌仙

雪のねをよしとらしむるは

杉見

あまのまをよしとらしむるは
と神子さびき新巻

日れゆるすくれ 志の心もそ

孤を

日れゆるすくれ 志の心もそ
と神子さびき新巻

下力有と一舟三つよあゆ

日れゆるすくれ 志の心もそ
と神子さびき新巻

あいつとささしけ ちなれ休 子冊

あいつとささしけ ちなれ休
と神子さびき新巻

ふみあはるんあつとる白ね

拙傳

あいつとささしけ ちなれ休
と神子さびき新巻

ふみあはるんあつとる白ね

初巻

あいつとささしけ ちなれ休
と神子さびき新巻

悠るるりねまわらる 秋の水

袋舟

悠るるるりねまわらる 秋の水
と神子さびき新巻

あいつとささしけ ちなれ休
と神子さびき新巻

あつとるりねまわらる 秋の水

妙傳

あいつとささしけ ちなれ休
と神子さびき新巻

こころあはるんあつとる白ね

子冊

あいつとささしけ ちなれ休
と神子さびき新巻

あつとるりねまわらる 秋の水

法圃

甘坊く所は依は二物抄く

外り波を流る井物くくまのまて 石菊

二物抄用之井り波をくまのまのまに流るる
草あり儼佃ある事と出くくまのまに流るる
干物何れもあれはそくくまのまに流るる
村をくまのまのまに流るる事と出くくまのまに流るる

稲丹 子れさすくくまのまに流るる 杉丸

白た者の一人もくくまのまに流るる 杉丸

めくくまのまに流るる 初牛

ありの浦れれくくまのまに流るる
竹をくくまのまに流るる事と出くくまのまに流るる

くくまのまに流るる 依く

くくまのまに流るる
くくまのまに流るる事と出くくまのまに流るる

少くくまのまに流るる 枕席

くくまのまに流るる 子冊

くくまのまに流るる 石三本

くくまのまに流るる 杉丸

景曲眼か 結くくまのまに流るる

形中
其の母の跡をくくまのまに流るる
上を散ると暖まるとくくまのまに流るる
てかき扱す和をわらうくくまのまに流るる
子の散る様く
茶の川を直し流るる事と出くくまのまに流るる
女き日とくくまのまに流るる事と出くくまのまに流るる
山あり川あり今朝くくまのまに流るる
御すくくまのまに流るる事と出くくまのまに流るる

前より損汁にてテマア買自ナリト其振廻ニ思ハ体ト先立部會ノ人情ヲ付タリ大坂人ニスレバ一月ノ
大坂有ク人ニスレトト云々味ニシ
テ舟中在テナリト大坂三ツテ
買自ニ云月物凄キ如クスレト云云

前より大坂ノ人ニスレバ有クハ
自ニ云テ力出ルルト見テ入算
ヲ付タリ大坂ヨリ田舎ノ者ナリニ行シモ
答祖母(トトノトハ様ナリ)

前より禁門ノ上ノ祖母ノ喜ヲ
体ト見立秋ノ様ヲ付タリ
様々ノ所前自白ノ人ナリト云云
様々ニ在ル先ニテ禁酒セシニテ
獄ニ送スルナリ

前より元伊屋ヲ守アハ分付ナリ住生ノ
親林ヲ担末ニオスニト云云様ナリ見立
丈内テノ煩悩ヲ付タリト云云
生數ニ得テ忘テ忘テ付セタカカ様
述ニテ咳クテ紫セハニキ儘ニ更テ
看經スル主人テサムケテ聞テ忘テセカト
ニト云テ付ヒトノ毎々ハ是亦
後生願ノ様ナリ

分子其れらるる子 祖母の子ナリハ云云
子母 子母
利生

前より大坂ノ人ニスレバ有クハ
自ニ云テ力出ルルト見テ入算
ヲ付タリ大坂ヨリ田舎ノ者ナリニ行シモ
答祖母(トトノトハ様ナリ)

前より禁門ノ上ノ祖母ノ喜ヲ
体ト見立秋ノ様ヲ付タリ
様々ノ所前自白ノ人ナリト云云
様々ニ在ル先ニテ禁酒セシニテ
獄ニ送スルナリ

前より元伊屋ヲ守アハ分付ナリ住生ノ
親林ヲ担末ニオスニト云云様ナリ見立
丈内テノ煩悩ヲ付タリト云云
生數ニ得テ忘テ忘テ付セタカカ様
述ニテ咳クテ紫セハニキ儘ニ更テ
看經スル主人テサムケテ聞テ忘テセカト
ニト云テ付ヒトノ毎々ハ是亦
後生願ノ様ナリ

前より大坂ノ人ニスレバ有クハ
自ニ云テ力出ルルト見テ入算
ヲ付タリ大坂ヨリ田舎ノ者ナリニ行シモ
答祖母(トトノトハ様ナリ)

前より禁門ノ上ノ祖母ノ喜ヲ
体ト見立秋ノ様ヲ付タリ
様々ノ所前自白ノ人ナリト云云
様々ニ在ル先ニテ禁酒セシニテ
獄ニ送スルナリ

前より元伊屋ヲ守アハ分付ナリ住生ノ
親林ヲ担末ニオスニト云云様ナリ見立
丈内テノ煩悩ヲ付タリト云云
生數ニ得テ忘テ忘テ付セタカカ様
述ニテ咳クテ紫セハニキ儘ニ更テ
看經スル主人テサムケテ聞テ忘テセカト
ニト云テ付ヒトノ毎々ハ是亦
後生願ノ様ナリ

前より大坂ノ人ニスレバ有クハ
自ニ云テ力出ルルト見テ入算
ヲ付タリ大坂ヨリ田舎ノ者ナリニ行シモ
答祖母(トトノトハ様ナリ)

前より禁門ノ上ノ祖母ノ喜ヲ
体ト見立秋ノ様ヲ付タリ
様々ノ所前自白ノ人ナリト云云
様々ニ在ル先ニテ禁酒セシニテ
獄ニ送スルナリ

前より元伊屋ヲ守アハ分付ナリ住生ノ
親林ヲ担末ニオスニト云云様ナリ見立
丈内テノ煩悩ヲ付タリト云云
生數ニ得テ忘テ忘テ付セタカカ様
述ニテ咳クテ紫セハニキ儘ニ更テ
看經スル主人テサムケテ聞テ忘テセカト
ニト云テ付ヒトノ毎々ハ是亦
後生願ノ様ナリ

前より大坂ノ人ニスレバ有クハ
自ニ云テ力出ルルト見テ入算
ヲ付タリ大坂ヨリ田舎ノ者ナリニ行シモ
答祖母(トトノトハ様ナリ)

前より禁門ノ上ノ祖母ノ喜ヲ
体ト見立秋ノ様ヲ付タリ
様々ノ所前自白ノ人ナリト云云
様々ニ在ル先ニテ禁酒セシニテ
獄ニ送スルナリ

前より元伊屋ヲ守アハ分付ナリ住生ノ
親林ヲ担末ニオスニト云云様ナリ見立
丈内テノ煩悩ヲ付タリト云云
生數ニ得テ忘テ忘テ付セタカカ様
述ニテ咳クテ紫セハニキ儘ニ更テ
看經スル主人テサムケテ聞テ忘テセカト
ニト云テ付ヒトノ毎々ハ是亦
後生願ノ様ナリ

前より大坂ノ人ニスレバ有クハ
自ニ云テ力出ルルト見テ入算
ヲ付タリ大坂ヨリ田舎ノ者ナリニ行シモ
答祖母(トトノトハ様ナリ)

前より禁門ノ上ノ祖母ノ喜ヲ
体ト見立秋ノ様ヲ付タリ
様々ノ所前自白ノ人ナリト云云
様々ニ在ル先ニテ禁酒セシニテ
獄ニ送スルナリ

前より元伊屋ヲ守アハ分付ナリ住生ノ
親林ヲ担末ニオスニト云云様ナリ見立
丈内テノ煩悩ヲ付タリト云云
生數ニ得テ忘テ忘テ付セタカカ様
述ニテ咳クテ紫セハニキ儘ニ更テ
看經スル主人テサムケテ聞テ忘テセカト
ニト云テ付ヒトノ毎々ハ是亦
後生願ノ様ナリ

前より大坂ノ人ニスレバ有クハ
自ニ云テ力出ルルト見テ入算
ヲ付タリ大坂ヨリ田舎ノ者ナリニ行シモ
答祖母(トトノトハ様ナリ)

つぎに字をらひぬ 初月よれ門徒坊より水くさむ 活圃
と申す
法衣をすまむらう一書と帝と道とも玄耳
おろしめきとれ一にありてやめとれん
ゆゑにす中道なるももくわんをりり
てゆゑにむらう大信カレ信ちる又信をこま
しめて修んぬるももくわんをりり
いと信不頼りきしめて中道坊ももくわんおれ
は句解一もめくるももくわん信ちる
不以禮節之亦不修行也
孤を

同下の中下句やの年々時定

一書よ在る所のくさむらうとま
あなをく都ろ 初月よれ我世正年一すむとや 初牛
姉よはげれよまむ
おれとやのあまおれ書物の上をるも信ち
とらるる句解し
とねる初月よれまむらひまむらう中 せん

此のしよま本をのつらするもくわんをりり
まはまの心ゆく 梅一本くさむらう 活圃
那一本の信あまもくわんをりり
活ふ在曲り
とねる初月よれまむらひまむらう中 せん

梅のつぼみは秋の心ゆく

梅のつぼみは秋の心ゆく 活圃
一画箋に梅もくわんをりり
とらるる句解し
とねる初月よれまむらひまむらう中 せん

むあつちんは秋の心ゆく 活圃
とらるる句解し
とねる初月よれまむらひまむらう中 せん

うらないうらなうらなうらな
あつらうや 東の光の日の白ひ 土ま

あつらうや 東の光の日の白ひ
あつらうや 東の光の日の白ひ
あつらうや 東の光の日の白ひ
あつらうや 東の光の日の白ひ

梅のつぼみ 梅のつぼみ 梅のつぼみ
梅のつぼみ 梅のつぼみ 梅のつぼみ

赤い花のつぼみ 赤い花のつぼみ
赤い花のつぼみ 赤い花のつぼみ

しらべのつぼみ しらべのつぼみ
しらべのつぼみ しらべのつぼみ

一書にむの空のうらなうらな
あつらうや 東の光の日の白ひ
あつらうや 東の光の日の白ひ
あつらうや 東の光の日の白ひ

心 ことなるやせの梅のつぼみ
ことなるやせの梅のつぼみ

あつらうや 東の光の日の白ひ
あつらうや 東の光の日の白ひ

一書にむの空のうらなうらな
あつらうや 東の光の日の白ひ
あつらうや 東の光の日の白ひ
あつらうや 東の光の日の白ひ

七つらや 梅のつぼみ 梅のつぼみ
七つらや 梅のつぼみ 梅のつぼみ

梅のつぼみ 梅のつぼみ 梅のつぼみ
梅のつぼみ 梅のつぼみ 梅のつぼみ

うらないうらなうらなうらな
あつらうや 東の光の日の白ひ 仙枝

あつらうや 東の光の日の白ひ
あつらうや 東の光の日の白ひ
あつらうや 東の光の日の白ひ
あつらうや 東の光の日の白ひ

あつらうや 東の光の日の白ひ

紙の

しつらしつらとあしつくし申 去来
紙上二筆二筆といふくわうすまきつ刻り
あつはつといふくわうすまきつ

大弟や土持ち出て来紙の 友章

和あるうしと大弟紙のほれると誦しよす
うし行守れ地をるそ音あそくのうしと
こゝろと地をるそ音あそくのうしと
うしと地をるそ音あそくのうしと

おぼろ月すゞとるるれの乃中へ 仙基

月すゞとるるれの乃中へ 仙基
月すゞとるるれの乃中へ 仙基
月すゞとるるれの乃中へ 仙基

長川の年子

そまあやとるるれはあともとすし
そまあやとるるれはあともとすし
そまあやとるるれはあともとすし

三十二言語秘笈ニテ
見入

或説曰或云ふに曰種々書し
不出作者心不空なる
又言曰能得く虚空實開
遊故ニ理不現と面白
りた作アリとトカヤ

十五日とらや晴夕のたのしみ

西月と夕のたのしみ
夕のたのしみ
夕のたのしみ

物に急知のうらみ

物に急知のうらみ
物に急知のうらみ
物に急知のうらみ

ねんをん之はほれん

ねんをん之はほれん
ねんをん之はほれん
ねんをん之はほれん

うらみよ

うらみよ
うらみよ
うらみよ

うらみよ

うらみよ
うらみよ
うらみよ

思ふ者近材はあし
文とくあやき
うらみよ

杜子美 便気 太丁 字

くらしをんあなはり 産こし 杜梅

くらしをんあなはり 産こし 杜梅

くらしをんあなはり 産こし 杜梅

くらしをんあなはり 産こし 杜梅

くらしをんあなはり 産こし 杜梅

梅子 一月 梅子 梅子

梅子 一月 梅子 梅子

梅子 一月 梅子 梅子

梅子 一月 梅子 梅子

梅子 一月 梅子 梅子

梅子 一月 梅子 梅子

梅子 一月 梅子 梅子

梅子 一月 梅子 梅子

梅子 一月 梅子 梅子

梅子 一月 梅子 梅子

今年廿揮之けしつら物つの中

雨後はを色し開て又つてつらつあつきつて

土をぬき舞ふちり色也 枝のし中

お男のちみ持うてあまはは枝折おる

枝もく伐しめ竹を枝のし中

修松とさつ

念ふわくみくつばけむ枝のし

去ま一初れつてはさるる

流るうしつめみせくも枝

徒あてつてつとさつさのふとつて

るるをまると枝 寸やあ陰のまあつては

いとらふりあつてつらつあつてつらつあ

とよ枝折しつてつ枝のし中

あまのあつてあまのあつてあまのあつて

あまのあつてあまのあつてあまのあつて

はつしふんそらああつてつらつ

芭蕉

めつしやゆあつてつらつ

けさあつてつらつあつてつらつあつて

あつてつらつあつてつらつあつて

あつてつらつあつてつらつあつて

あつてつらつあつてつらつあつて

てんてんあててらるる

~~~~~あててらるる

何れかたのぬれあててはけりて

中ちとらじあてぬれあててはけりて

かこあててはけりてあててはけりて

あててはけりてあててはけりて

あててはけりてあててはけりて

あててはけりてあててはけりて

あててはけりてあててはけりて

あててはけりてあててはけりて

あててはけりてあててはけりて

無地曰白氏多集

二月五日花や雪五十七  
二人顔似霜

愚考曰字云曰

細花夕月世家ト云ハ

空也ト云ハ夕飯ト云ハ

心と手と云ハ

ふろ子

ふろ子

ふろ子

ふろ子

ふろ子

斜山

愚考曰柳の加名汝をむ  
痛しむる此けさくゆ  
古語曰折花云衣当衣さん  
必をむむむの用もさるる

白文とて世をておらるる時々々々々々々々々々

おらるる時々々々々々々々々々

おらるる時々々々々々々々々々

おらるる時々々々々々々々々々

牡丹すくもやあててはけりて

あててはけりてあててはけりて

あててはけりてあててはけりて

あててはけりてあててはけりて

あててはけりてあててはけりて

あててはけりてあててはけりて



あきつら

わあまうあぢわらうてあぢん さん  
りあまうあぢわらうてあぢん

今もあぢわらうてあぢん 全

あぢんあぢわらうてあぢん  
あぢんあぢわらうてあぢん

古  
中山常おき  
川乃井乃のまき

あぢんあぢわらうてあぢん  
あぢんあぢわらうてあぢん

あぢんあぢわらうてあぢん 桔陣

あぢんあぢわらうてあぢん  
あぢんあぢわらうてあぢん

あぢんあぢわらうてあぢん 桔陣

あぢんあぢわらうてあぢん 桔陣

あぢんあぢわらうてあぢん  
あぢんあぢわらうてあぢん

あぢんあぢわらうてあぢん  
あぢんあぢわらうてあぢん

あぢんあぢわらうてあぢん 利牛

あぢんあぢわらうてあぢん  
あぢんあぢわらうてあぢん

湯子にまよひては情をこころにせぬ極れ五文  
字のさくらまはす物ありさる不化去玉縁の  
結をこそかす

まき物れ流しきつらてはつこし  
抑はれしつらてはつこし

流しきまを打ちむ少あやこし  
解つてしつらてはつこし

一書工ぬくときをのらふ

まき物れ流しきつらてはつこし

まき物れ流しきつらてはつこし

まき物れ流しきつらてはつこし

まき物れ流しきつらてはつこし

まき物れ流しきつらてはつこし

まき物れ流しきつらてはつこし

まき物れ流しきつらてはつこし

まき物れ流しきつらてはつこし

まき物れ流しきつらてはつこし

まき物れ流しきつらてはつこし

まき物れ流しきつらてはつこし

松何れ

まき物れ流しきつらてはつこし

此年未のちく半あるは物な格立りあり  
るに市川中へてこころなり

中々あらとこまれけりもあつしや さと

は南にそをけりてすししけ年ぬけり心とこ  
白きまふりてけりてあつしやの余格あ

格さうとゆへりてあつしや 利牛

格さうとゆへりてあつしやのりひ別はひり物  
さうとゆへりてあつしやのりひ別はひり物  
はひりてあつしやのりひ別はひり物

書之部ぬ句

増くそめくはすりて衣軍 山を

増えれあつしやのりひ別はひり物

衣こうえ十日とやくとそあつしや ヤハ

はつしやのりひ別はひり物

線そめく格水をヤと衣軍 九印

線そめく格水をヤと衣軍

少はすりてあつしやのりひ別はひり物 雲芝

少はすりてあつしやのりひ別はひり物

甘みのけりてあつしやのりひ別はひり物 子圃

甘みのけりてあつしやのりひ別はひり物

之扇をいひてあつしやのりひ別はひり物 利牛

之扇をいひてあつしやのりひ別はひり物

柳の枝をくつき柳は乃々  
一書よて柳の節果しと云れは 祿源平柳富盛の事なり出づるより去下 後抄  
の句なりと云ふ三日月の柳  
何れ云ふや 柳の節果しと云へりなりと云ふは 杜律曰 隔天揚柳弱弱し  
二の節果しと云ふ事なり  
夜扣禪扉 謁遠公 了了以 洞あをを成着  
去来  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり

これぞわん柳ありくやう所らうけ  
あつらひ代田舎のつらひまゐる柳はむれ時  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり

馬を柳の節果し  
此柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり

柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり

柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり  
柳の節果しと云ふ事なり

柳の節果しと云ふ事なり



さうらうの舟の子を教へんらん

支考曰社律に老翁の病蟹と云ふものあり  
くんとてんらん云々五月のや蟹の  
葉代細くさうらうの舟の子を教へんらん  
ついでと云ふて其の意を云ふと又云ふらん  
三句をさうらうの舟の子を教へんらん  
一書に江戸本町一丁目二日の格えと云ふ二の格と云ふ別經舞の二日目の格系  
と云ふ一は二の二の寸あして二の格と云ふは  
格の格と云ふは二の格と云ふは  
愚考は二の格と云ふは二の格と云ふは  
ゆりきこの格と云ふは二の格と云ふは  
目もなると云ふは二の格と云ふは  
七のうはと云ふは二の格と云ふは  
後の方地ふむや  
ついでと云ふは二の格と云ふは  
来者出也と云ふは二の格と云ふは

さうらうの舟の子を教へんらん

桃打れらんは詮をりし中もきり 杉也

一んりおとこせたらふゆりちんをきりし  
さう桃打れらんは詮をりし中もきりし

あつちとて茶あ揚もすや行はす寸

右注お曰んをねぬちのうらもあつちとての月をさうらうの舟の子を教へんらん

あつちとて茶あ揚もすや行はす寸 素秋

右注お曰んをねぬちのうらもあつちとての月をさうらうの舟の子を教へんらん

あつちとて茶あ揚もすや行はす寸 利牛

あつちとて茶あ揚もすや行はす寸

あつちとて茶あ揚もすや行はす寸

あつちとて茶あ揚もすや行はす寸 ちん

あつちとて茶あ揚もすや行はす寸

あつちとて茶あ揚もすや行はす寸 前

武義白義徳國原見部立政持守領十五石倍二折もとい折之國ヶ原市原の村  
 此寺とし 神君子折を  
 敬りりたる大垣の  
 折れがせしき

老れ松 しろんらよやう飯沼の山 千州  
 の飯沼の山ヶ原の山よりのくんとをあるまはる  
 松を折らる知れはるまを我くもく  
 ありあそいりやう長き  
 老れ松 田舎の道行をたう賦体け白こ 修六  
 の飯沼松の川崎のまて返つて  
 川と折れ老れ白の女をたれ内 初年  
 おちりけりよ  
 老れ松 せものくくくく折れ松の中 さち

老れ松 しろんらよやう飯沼の山 千州  
 の飯沼の山ヶ原の山よりのくんとをあるまはる  
 松を折らる知れはるまを我くもく  
 ありあそいりやう長き  
 老れ松 田舎の道行をたう賦体け白こ 修六  
 の飯沼松の川崎のまて返つて  
 川と折れ老れ白の女をたれ内 初年  
 おちりけりよ  
 老れ松 せものくくくく折れ松の中 さち

水すくすくあそい 老れ松



清くもなやとさるりへあつるなまゆ

素沈

傳の一字作く

五月の雨やうらやま川とわ川

世降

あまうらやま川を五五の中れこちをく  
うらやま川の時作はあやとあや

清くもなやとさるりへあつるなまゆ

丸福あつる子あは後のあつるあつる

あつるあつるあつるあつるあつるあつる

五月の雨やうらやま川とわ川

ヤマコホウ

世降

五月の雨やうらやま川とわ川

世降

あつるあつるあつるあつるあつるあつる

川中れあつるあつるあつるあつるあつる

「五月の雨やうらやま川とわ川」

月うらやま川とわ川

女一の用

あつるあつるあつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつるあつるあつる

清くもなやとさるりへあつるなまゆ

卯七

あつるあつるあつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつるあつるあつる

川中れあつるあつるあつるあつるあつる

あつるあつるあつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつるあつるあつる

清くもなやとさるりへあつるなまゆ

あつるあつるあつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつるあつるあつる  
あつるあつるあつるあつるあつるあつる

すーしとてあはれし 柳枝のさつこ子 元治の  
大か子はさうさう水鏡子お向かきさる  
ひ情えさうまはれくらやうて諦し

すーしとてあはれしとくはあはれとく 玄末  
海人れはりのとくさくさくあはれは情も又約き  
えれんくさくぬわしきさくさく

ふすしけあはれさくさくさくのけりさく  
君さすをを情あはれとくさくさく  
さくさくはあはれさくさくさくさく

橋やらとあはれしとくさくさく  
橋やらとあはれしとくさく  
橋やらとあはれしとくさく

さくさくはあはれしとくさくさく  
さくさくはあはれしとくさくさく

神徳はあはれしとくさくさく  
むくはあはれしとくさくさく

海堂の大板はちり柳さくさくさくさく  
橋やらとあはれしとくさくさく  
さくさくはあはれしとくさくさく

世にやとあはれしとくさくさく 正秀  
世にやとあはれしとくさくさく 正秀

思ふは天竺大仲徳さくさく  
あはれしとくさくさく  
天徳田長田と植あはれしとく  
田植のさくさくさく

さくさくはあはれしとくさくさく  
さくさくはあはれしとくさくさく  
さくさくはあはれしとくさくさく

出るべき子其場におぬい懐古の影

ひさしはよ一雨降きぬの暮り白く 暮夕

山はよかおちろと  
そのあちまきと

山はよかおちろと

さう山々もさきさきのけしきらるるし 水鏡

生胡地浪去るるころころい噴きあるらん  
ふかふかぬぬとくさく山々茂山也

曉れぬとさまたせよとすれとて

おちるもれぬ影象をたたくは月と星と  
よまつく

一雨乞は一雨をさころころわさるる 大草

一雨を初るる雨をいさるるんはるん秋迄こ

るまき一雨は夕や 水鼓矣 仙花

果つてさきところをわたり心ちぬぬぬ

水鼓を御するころころいれいれおのよころとせし

あつろく水鼓をいれは飛ぶあつろくをさき

ころわつてころころいれいれおのよころとせし  
水鼓をいれは飛ぶあつろくをさき

一羊れ 晴しころけく不葉ころ 桂舟

羊れ草あつろくころ御あつろく晴のあつろく  
おちるれりまきとこれ

ちりころるころ 残音

ころるころるころ 残音

ころるころるころ 残音

独れ身ころ お有

山はよかおちろと お有

手むきら侍所あはれ〜 思ん

其の用は極まらぬやあはれ〜 思ん  
つら日あはれ〜 思ん  
と我も折る〜

〜 思ん 梅やあはれ〜 祐甫

能るの梅とあはれ〜  
念もさる〜

一枝さすけるふ竹れワの〜 仙志

五弁と皮を削て一枝ゆ〜  
すはらま〜

竹れ〜 止ま〜 嵐を

横笛は春〜  
と〜 思ん

さつ〜 思ん 酒を〜  
さつ〜 思ん  
あ〜 思ん  
あ〜 思ん

梅玉葉〜  
あ〜 思ん  
あ〜 思ん  
あ〜 思ん

明月や〜 思ん  
今〜 思ん  
〜 思ん

名月や標とくまろ寸まわりの虚 志未

山室けりきくまわりの中柱の感あり

赤空してくしくの影を月相くさ 乙雨

伊勢の赤空をわらわぬ海に使者の空を  
くさくさとして

名月や誰に託すお村の影 酒堂

月影のふちのよるまのちのこころに  
白のまを赤く吹かすこころのこころ

ねらけや生糸扱一はれ月見 連葉

生糸扱の裏をすくひころを扱くお村のけえ  
はれ月影のこころにねらけのこころを  
月影の影に扱くこころのこころを  
くさくさとする伊勢の海をくさくさ

わち汐に松の影のこころよりあつた 和子

わち汐のこころの影のこころよりあつた

乙雨

伊勢の赤空をわらわぬ海に使者の空を  
くさくさとして

望望岸ノ不立立帆波ヲ

望望岸ノ不立立帆波ヲ

毎々とんす下けろやほしむく 幸角

毎々とんす下けろやほしむく  
幸角

お花の月影とまゝのこころの  
お花の月影とまゝのこころの  
お花の月影とまゝのこころの  
お花の月影とまゝのこころの  
お花の月影とまゝのこころの  
お花の月影とまゝのこころの  
お花の月影とまゝのこころの  
お花の月影とまゝのこころの  
お花の月影とまゝのこころの  
お花の月影とまゝのこころの

和子



年少のむねを思ふ  
しるしをうらむる人なり  
しるしをうらむる人なり

七人のやうなうらむる人あり  
あはれなり

あはれなり  
あはれなり

あはれなり  
あはれなり

あはれなり  
あはれなり

あはれなり  
あはれなり

あはれなり  
あはれなり

あはれなり  
あはれなり

あはれなり  
あはれなり

あはれなり  
あはれなり

帰去来の辞の門紙後書田突

何れか  
何れか

何れか  
何れか

何れか  
何れか

何れか  
何れか

何れか  
何れか

何れか  
何れか

何れか  
何れか

何れか  
何れか

何れか  
何れか

何れか  
何れか

何れか  
何れか

何れか  
何れか

何れか  
何れか

何れか  
何れか

上のはの下のほの  
心とほのしをえん

上のはの下のほの  
心とほのしをえん

上のはの下のほの  
心とほのしをえん

上のはの下のほの  
心とほのしをえん

上のはの下のほの  
心とほのしをえん

それこそ将きつる作者の粉雪

悔不ふれとまればまろく〜ん 女

あのおれあそれ悔れ一字をとり人よ酒を  
すむ作者もろく〜んまろく〜ん 我白ありまろく〜ん  
〜すれまろく〜ん 知れ

鶴嶋子〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 女

昔又とほろ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
形象をいつ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
此車より〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
つらかり〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
農を業〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
送化れ自然〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
の〜ん〜ん〜ん

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 信れ上 孤  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 女

友二并れ〜ん〜ん〜ん 小麻〜ん 津来

友二并れ五文字を長〜ん〜ん〜ん 南部又ハ者出〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 知れ字作者ハ信大あり〜ん  
吐せ〜ん

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 新恒取 幸終

〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 似〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 信れ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 忠告〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 知れ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

近江路〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 長 士芳

近江路も白山の丘下〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
近江路の岩向〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
す〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 又知〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
不〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 知れ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 知れ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん  
〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん 知れ〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん

紙書りたるを  
手書に子母母の紙も本紙  
み仲納付の紙、  
おやわしと付紙あり

手書はけと紙をいへば紙深りたる  
村をいへば紙をいへば紙深りたる  
紙をいへば紙をいへば紙深りたる

行園子と紙をいへば紙深りたる  
猿錐

カメチカノ本林ノ本ハ千をけきりつと向ん  
をけきりつと向ん 新紙換ふ紙

昔れ紙をいへば紙深りたる  
女子

村の古れたるその妻人愛されて昔れいん  
紙をいへば紙をいへば紙深りたる

ちつと紙をいへば紙深りたる

昔れ紙をいへば紙深りたる  
去来

女中れ昔れ紙をいへば紙深りたる

昔れ紙をいへば紙深りたる  
子母

つれと紙をいへば紙深りたる  
紙をいへば紙をいへば紙深りたる

園子

五巻りたるを  
紙をいへば紙をいへば紙深りたる  
紙をいへば紙をいへば紙深りたる

昔れ紙をいへば紙深りたる  
紙をいへば紙をいへば紙深りたる

紙をいへば紙をいへば紙深りたる  
紙をいへば紙をいへば紙深りたる

紙をいへば紙をいへば紙深りたる  
紙をいへば紙をいへば紙深りたる

紙の故り、  
紙の故り、  
紙の故り、



ふとふと後子抱きまや  
ささ

相撲とくや 枝々も  
うんを

あはれりやあふり  
女子

曲はなむか  
素直や人し

あはれりやあふり  
酒を

あはれりやあふり  
若

何れ考本名曰山中  
実之やうさるる

あはれりやあふり  
利心

必加子を  
菌毒母

あはれりやあふり  
支老

あはれりやあふり  
わ校

あはれりやあふり  
依

あはれりやあふり  
て雨

何れ考本名曰山中  
丑女裁清  
世彼山  
云の



成美曰南なる山美濃なるは... 後之故南なる山と致す... 松皮骨のこと... 松皮骨のこと... 松皮骨のこと...

あつた月か... 松皮骨のこと... 松皮骨のこと... 松皮骨のこと... 松皮骨のこと...

松皮骨のこと... 松皮骨のこと... 松皮骨のこと... 松皮骨のこと... 松皮骨のこと... 松皮骨のこと... 松皮骨のこと... 松皮骨のこと... 松皮骨のこと... 松皮骨のこと...

とて國と屋ふけつるる不れ力病と石世人の  
侍とす

伸りこせらるるうたの土大根 源実

伸るるはあれくけしれ土大根ハ朝日ハ終り  
用こし又信成さるる事もささるる

くたすれねどもさるるさるるさるる うた

くたすれねどもさるるさるるさるる さるる

先んたんかあつてたれなもさるるさるる

若もま切子明りたるさるるさるる 利牛

さるるあつてさるるさるるさるるさるる

さるるさるるさるるさるる 我角

人跡板橋をた

さるるさるるさるるさるる 里奈

さるるさるるさるるさるるさるる

注

らるるさるるさるるさるるさるる

伸るるさるるさるるさるる せん

さるるさるるさるるさるる 利牛

さるるさるるさるるさるる

伸るるさるるさるるさるる 富山

さるるさるるさるるさるる 古雅

伸るるさるるさるるさるる 伸るるさるるさるるさるる



雪のよき借りし 鶯鶯 依

鶯鶯いさふし丹あつしあふれんりふれ  
あふれんりふれ  
いさふれ

雪のよき借りし 鶯鶯 依  
物 粘

物 粘  
いさふれ  
いさふれ

あつね

物 粘

支店  
物 粘  
いさふれ  
いさふれ

新交り空あん 物 粘  
いさふれ  
いさふれ

あつね

物 粘

あつね

物 粘

あつね

物 粘

あつね

物 粘

あつね  
いさふれ  
いさふれ

こゝろあや粉粉あゝゝゝ白の燈

移りけ草は衣あつらん十夜こゝろ  
行六

移りけ草は衣あつらん十夜こゝろ  
類聚草子卷之九に云ふ草子  
草子代り用ひ

移りけ草は衣あつらん十夜こゝろ  
移りけ草は衣あつらん十夜こゝろ

白の魚はあきと傍とてさしこゝろ  
移りけ草は衣あつらん十夜こゝろ

移りけ草は衣あつらん十夜こゝろ  
移りけ草は衣あつらん十夜こゝろ

移りけ草は衣あつらん十夜こゝろ  
大州

三勢詩子年長芳推甲子夜寒  
初共詩子年長

移りけ草は衣あつらん十夜こゝろ  
移りけ草は衣あつらん十夜こゝろ

移りけ草は衣あつらん十夜こゝろ  
移りけ草は衣あつらん十夜こゝろ

移りけ草は衣あつらん十夜こゝろ  
移りけ草は衣あつらん十夜こゝろ

移りけ草は衣あつらん十夜こゝろ  
轉山巖奇絶

移りけ草は衣あつらん十夜こゝろ  
五季仙元金子こゝろ

すし押  
下雅すしれ者ハ

すし押  
下雅すしれ者ハ

餅作すやえ 飯さくろ 草履くさく

ちいれやまえ 橋さくろ 草履くさく  
秋のふかき 草履くさく 草履くさく

山伏れ へくす せり せり せり せり

草履くさく 草履くさく 草履くさく 草履くさく  
草履くさく 草履くさく 草履くさく 草履くさく

はくすや 氷すす へくす へくす

水くさく 水くさく 水くさく 水くさく  
水くさく 水くさく 水くさく 水くさく

ふくすや 又くす へくす へくす

ふくすや 又くす へくす へくす  
ふくすや 又くす へくす へくす

くさく へくす へくす へくす

愚考 送手白集  
手あつた 愚考 送手白集

おねろふ 愚考 送手白集  
おねろふ 愚考 送手白集

愚考 送手白集  
愚考 送手白集  
愚考 送手白集

海ぬす へくす へくす へくす

海ぬす へくす へくす へくす  
海ぬす へくす へくす へくす

やれ ねく へくす へくす

やれ ねく へくす へくす  
やれ ねく へくす へくす

くさく へくす へくす へくす

くさく へくす へくす へくす  
くさく へくす へくす へくす



リト又天台より天台山より伊予常吉ありて約慮の氣と云ふと定法なる  
るるゆゑは約法の至し佛心は新院新依を教を以て釈迦何んぞ私何んぞ  
心付心を以て号すと又釋と云ふ釋と云ふ心絶想よりして釋うめくるは  
俱舍律の法にして和約の法なる譯去を極平の惣名を以て淨土の云号を  
三昧よりうめくは生まぬの要るるは極平の云号を大徳まはしてのまらむ  
と依約を以ての云号なる人なり理を必牛子何んぞ云ふ

此宗祇也其蓮あるありて中  
芝山曰佛宗依曰新田をその親王勝田の地なりといふは感徳阿の阿の  
還りたのまひて極平婦人は依て曰今日極平は極平田の地なりといふは水清  
蓮物と云ふ極平は極平の地なり勝田の地なりといふは極平の地なりといふ  
もるるれのを依て曰勝田の地なり我知蓮ありと云ふは極平の地なりといふ  
中と云ふ極平の地なりといふは勝田の地なりといふは極平の地なりといふ  
親法師の云ふの親王を以ての云は極平の地なりといふは極平の地なりといふ  
極平の地なりといふは極平の地なりといふは極平の地なりといふは極平の地  
よありと云ふ人其その氣を感徳歎を以て云ふなり

又見たりと云ふ  
大和の地なり





